批評・紹介

六朝思想史研究

村上嘉實 著

昭和四十九年三月　京都　平樂寺書店　A5版　四七四頁

本書は、六朝における「格」にたいする「逸」の考察にあてられることが序にのべられている。耳に熟した言葉ではかならずしもないけれども、「格」とは漢代に確立し、以後二千年、「官僚支配階級の政治哲學」となった儒教のことにほかならない。それはまた「正統性」ともよびかえられている（三九七頁）。この「格」にたいする「逸」、すなわち「逸格」の動きが活潑になったのが六朝においてであることは、著者とともに承認しうるであろう。著者によればそれはまず「非禮教的なもの、從って非政治的なもの」（一六七頁）としての老莊であり、老莊を思想的根據とするところの道教であり、また老莊を媒介として受容された佛教であった。さらにまた、六朝は人間が美の世界にめざめた時代であり、その根本には人間個性の自覺があったという。かくして過去三十年における論文十九篇が、一、道教思想、二、老莊思想、三、佛教思想、四、思想と政治、五、思想と藝術、六、六朝の精神、の六章に按配配列されている。これら各章のタイトルを一見して明らかなように、内容は多面的、包括的である。なかには、近代工業技術における機構のなかへの人間の埋沒、人間性喪失の問題にふれて、無心に物のなかに隨順することによりかえって物の理を自己のがわに奪いとり、對象を自由に支配しうる老莊の自然の立場の優位を論じた「人爲と自然」のごとき、あまり肩のこらない文章も收められている、といっても禮を失することにはならないであろう。

これら十九篇のうち、第一章の第一節、すなわち冒頭におかれた「道教における欲望肯定の思想」はあらたに書きおろされた文章である。著者の考えでは、中國は欲望肯定の國であり、禁欲主義は育たなかった。とりわけ老莊ないし道教は、欲望の肯定、そのかぎりなき充實を、欲望の淨化において追究するところに特色をもつ。老莊ないし道教における否定—無欲恬淡—は實は欲望肯定のための否定であり、この否定のゆえに欲望の淨化がなしとげられる。欲望の淨化とは、さらに詳しくいえば、「宇宙の生命的根源（玄道）と神祕的に合一し、事實をその根柢に突破して、超現實の世界に勇躍する」ことであって、あくまで現實をふまえながら、現實のなかへなかへと沒入する超越であるために、「内在的超越」とよばるべきだといい、それはまた實踐否定とも行爲的否定ともよばれている。超現實に生きるがゆえにしばしば幻想的であり、また道教のなかから種々の科學や技術が生れたことはその神祕主義と關係している。なんとなれば宇宙の根源と一體となることによって、宇宙の機密を自由に操作することが可能となるからであって、そのためには宇宙觀として汎神論的哲學が必要であった。ただし、民衆道教においては欲望の淨化が行われなかったために、つまり否定の論理がはたらかなかったために、現世利益—福祿壽—追求の宗教となった。云々。

この一篇をのぞいては、すべて既發表の論文にいくらかの修改訂をほどこされたものであるので、一一についての紹介、批評という手順はふまないでおきたいが、右に示された著者の觀點が他の諸篇における重要なテーマとなっていることはいうまでもない。たとえば、老莊と佛敎の否定の性格の相違をとりあげて、「佛敎の否定は、初めに現實から離れ、完全に離脱した後で、再び現實に還ってゆく。そのために往相と還相とが說かれる。老莊は、初めから現實の中に入ってゆく。傷つき、鬪い、あらゆる試行錯誤の後、しだいに對象の實體を把握し、その中にはたらいている法則に隨順してゆく。このような過程のなかで無心がなしとげられる」とのべられた論旨は、第二章二節「老莊の實踐否定」において詳說されるし、また第三章に收められた「僧肇の佛敎思想」、「慧遠の方外思想」等においても、六朝における中國佛敎の展開の跡が、老莊の否定と佛敎の否定—老莊の實踐否定、行爲的否定にたいして、知をもって知を否定する認識論的、觀照主義的否定—とがどのように關係しあっているのか、そして「現實の根柢をなす實在」がいかにして明らかにされたか、かかる視點のもとに具體的、歷史的に追求されるのである。

では僧肇の佛敎思想の構造はどのように描きだされているであろうか。僧肇は因緣說によって物（物的存在・人・事象）を不眞とみる物虛觀のうえにたちながらも、非現實的な思想とならないで、むしろ物を支配する強い現實肯定の立場に出ている。すなわち、物虛觀を成りたたしめるためにひとまず彼岸的な神の立場に出ながら、そこに安んぜず、老莊、とりわけ郭象の流をくむ無心隨順による物我同根の思想によって、此岸的なもののなかに眞を見いだそうとした。かくしてそれは「中國佛敎にとって宿命的な方向を示すもの」であり、「中國の風土に卽した現實的な宗敎として發展し得た」のだという。一方、慧遠が桓玄にたいして沙門不敬王者の立場を堅持したのは、沙門が宗極—佛敎的實在—の追求に生きる「方外の賓」の自覺にもとづくものであったことはよく知られているが、慧遠のいわゆる宗極はつぎのように說明される。慧遠は「反本求宗者、不以生累其神、超落塵封者、不以情累其生、不以情累其生則生可滅、不以生累其神則神可冥、冥神絕境、故謂之泥洹」（沙門不敬王者論、求宗不順化）と、生の否定が沙門の立場であることを力說するけれども、そこにはなお情に累わされない生、生に累わされない神がある。彼のいう否定は反本求宗、冥神絕境であって、老莊の無心の境地と根本的に異なるものではない。すなわち、神はインド的に無自性として否定されるのではなくして、隨所に主となるところの內在的性格をもっている。とはいえ、慧遠の晩年には、羅什の影響によって性空の義にも考究がすすみ、神についての獨自の開明がなされた。「神が萬法の中にはたらきながら、それ自身は有でもなく無でもなく、物を超え物に妙れ、つねに現象の根柢となって現象を動かす不滅の主體であること」、つまり神は物に內在するとともに、性空思想によって物から完全に獨立する性格をあたえられたというのであり、かくして著者はつぎのように結論している。「慧遠の不滅の神が超越性と共に現實內在的な性格を有することは、佛敎を政治性の強い中國に樹立するために重要な原理となった。この原理のゆえに、佛敎はその超越性を保ちながら、而も政治的敎化の本となって、本末一體的に調和的な世界觀を立てることができた……」。

ここにいたってわれわれは、純粹に思想の領域から、政治、社會と關連する思想の領域へ、いわば歷史的な領域へ進む足がかりをあ

たえられるであろう。六朝では方外の世界と方内の世界とが、その内外のちがいにもかかわらず、かならずしも對立の關係にあったのではなく、兩者が浸透しあい、あえていえば前者が後者の中に化肉する、そのような關係が成立していたのではないか、という問題である。このことをはやい時期に示唆したのは葛洪であったろう。著者がのべているように、「葛洪の世界觀においては、現實的な治世の世界の根本に、更に優越的な神仙世界が存在していた。神仙世界は超現實であり、この超現實こそ彼にとっては眞實なるものであった。しかしながら道は唯一にして普遍的なものである以上、本たる神仙世界も、末たる現實世界も、ともに一貫してあるもの」（「葛洪の政治思想と世界觀」）であったからである。ただし葛洪の場合、それはたんなるゾルレン、希望の表白、に終らざるをえなかったという印象のぬぐいがたいことはたしかである。しかしやがてそれが、六朝的世界の生きた現實となったのではないか。そのようなことを考えさせてくれるのが、第四章に收められた諸篇である。たとえば「隱逸」において、西晉時代の隱逸には亂世なるがゆえに政治世界から逃避する權力への抵抗の姿勢があり、したがってみずから勞働して耐乏的な生活に甘んずる風―中國の隱逸の本來的傳統があったという。とすれば、そこではまだ方外と方內とはきびしく對立しあっているというべきであろう。だが東晉時代になると、自己の田園にいながらにして隱れる裕かにして樂しむべき隱逸、自適主義の隱逸が主流となる。しかも彼らは道德學問の保持者として王朝の尊敬をうけ、世人の稱賛をえたのである。この事實にたいして著者は、「それは一見逃避性が薄らいだように見えるけれども、實は門閥による貴族社會が固定してきた爲に起ってきた現象であり、社會そのものが國家權力から逸脫してきたとも見られる」と說明をあたえている。しかしむしろ、方外的なるものが方內的なるもののなかに化肉するにいたった現象と理解できないであろうか。かくいうのは、慧遠教團のありかたがこのような方內と方外との關係をいっそうよく示しているように考えられるからにほかならない。けだし教團は隱逸者の集團と考えることもできようが、さて慧遠みずからが任じた「方外の賓」の立場はけっして方內と矛盾對立するものではなかった。彼も葛洪ときわめてよく似た立場にたって、「實在を執る佛教が本であり、教化を布く儒教は末であるが、末は本が應現したものに外ならないから、中國の聖人は佛と終期を同じくする」、「教化の本を執る眞正の佛教教團は、當然國家權力及び貴族の經濟的援助を得て存立すべきものである」（一九八頁）と主張した。しかも慧遠の場合には、それはたんなる理想におわらなかった。慧遠教團は現實にもそのようなものとして存立しえたのである。葛洪の世界觀が「國家權力と對決して得たものではなかった」のにたいし、慧遠は「權力と對決することによって超越の理論を實驗した」ちがいによるのであろうか。いずれにせよ、殷仲堪、桓玄、盧循、劉裕たち、また朝臣や地方官たち、あるいは後秦主姚興までもが、それぞれの政治的立場のちがいにもかかわらずひとしく慧遠に歸依し、廬山の檀越となっているのはまことに興味ぶかいことである（「慧遠教團と國家權力」）。檀越の側には、實際的レベルの問題として、廬山教團に政爭や國際外交上の問題の處理の役割（沙門には南北間の自由な往來が認められていたことを想起せよ）を期待するところもあったかと想像されよう。しかしそれはまた方內的なるものがみずからのうちに方外的なるものを包攝せずしては存立しえない、その

ような世界の構造をも示唆しているのではあるまいか。したがって、「自ら方外の賓を以て任じ、俗界を高く超越している慧遠が、中國の南北はもちろん、遠く西域地方にまでも關係をもち、殆んど世界的な交渉を有していたこと」、そのことはたしかに「驚異に値いする」けれども、しかしむしろ私には、慧遠が方外の賓であったればこそかくありえたのではなかったかと思われるのだ。慧遠教團は六朝における方内と方外との關係をもっとも顯著に體現している事例であり、それにはその頂點にたつ慧遠の人格があずかってもいるであろう。だが自餘の六朝の宗教教團と國家とのあいだにも、おおかれすくなかれ相似の關係が存在していたのではないか。たとえば寇謙之と北魏王朝との關係はどうなのか。そのような問題關心がここから派生してくる。

方外的なるものの方内的なるものの中への化肉、それは當然、國家權力の質的變化をもたらすであろう。さらにまた國家權力を直接にになう貴族士大夫の精神のありかたにも關係するであろう。隱逸の愛好、また詳しく紹介する餘裕をもたないが第四章四節「吏事」に說かれた吏事蔑視の態度、第六章に描きだされた多樣なる個性、ことに「通」や「達」等々。右にのべた觀點にたつならば、それらはたんに「非政治性」の一語ではかたづけられない性格のものであろう。もっともここでたちいるにはあまりに大きな課題であり、私自身としても將來にのこすほかはないが、ところで彼らの高踏の精神が、一面ではまことに危い存在でもあったことを指摘しておくことはやはり必要であったろうと思われる。學問道德の保持者であるという隱逸の自負は、一轉して倨傲に變じうるものであった。また著者がしばしば指摘するように、彼らが『莊子』、とりわけ郭象の自然の思想によりどころをもとめていたとするならば、その自然は命（運命）であり、必然であり、至當であると說明されるのだから（一四三頁）、したがってそれが政治思想として機能するとき、門閥貴族制社會の重層的な階層秩序を維持する役割をになうことにもなったであろう。この點については、拙稿「六朝士大夫の精神生活」（岩波講座、世界歷史、第五卷）を參看されれば幸いである。

以下、氣づいた點をいくつか記しておきたい。鄴に華林園が立てられたのを石虎の時代と推定するにとどまって、確證はないというけれども（「六朝の庭園」）、陸翽の『鄴中記』に、「虎以五月發五百里内萬人、營華林苑、至八月、天暴雨雪、雪深三尺、作者凍死數千人……」と明證があり、それには他にも鄴の華林園にかんする斷片的記事がいくらかのこされている。また『北齊書』祖珽傳にみえる『華林遍略』を華林園の地圖を附した案内書のごときものか（同上）、というのは誤解であり、梁の武帝の勅命により學士たちが建康の華林園において編纂した類書にほかならない。それがきわめてはやい時期に北齊にもたらされたものであって、南朝文化にたいする北朝人士の憧憬ぶりを示す一史實である。そのほか、魏晉の思想では、忠と孝とは矛盾するものではなく、孝を最上の德としながら、また忠も尊い德とされていた、と論ぜられたところがある（「魏晉における德の多樣性について」）。この論旨にとりたてて異をとなえるものではないが、忠と孝の問題をとりあげるにあたっては、邴原にかんする話柄、すなわち君父がともに篤疾におちいり、もし藥一丸しかないときには、君を救うべきか、それとも父を救うべきか、との曹丕の設問に、「父なり」とこたえた話柄は、やはり逸すべきではなかったであろう。

これらはもとよりこまかな過誤である。それとは反對に、說きおよびえなかった論點のなかに、こまかではあるけれども傾聽にあたいするものが數多くあること、いうまでもない。たとえば、六朝知識人が政治の實務を下級の小吏にゆだねたところに胥吏發生の契機をみいだした「吏事」において、胥吏が活躍するには胥吏が日常に接する庶民のあいだの實力の成熟が必要であり、そのため胥吏の十分な發達は宋以後であると論ぜられているところ、あるいはまた第六章三節「個性」にみえるつぎの一文のごときは、なんでもないことのようであって實は鋭い指摘であると感ぜられる。「われわれは漢代までの人々が、どのような容貌をしていたかを知ることは困難である。しかるに魏晉の一部有名な人々については、ほぼその姿や顏の貌まで想い浮べることが出來るのは、この時代の特色である。」「格」としての儒家思想についての論究は他日を期すむねが序で約束されている。古稀を迎えようとされている著者のますます旺盛な研究をお祈りして、後進の蕪雜な批評と紹介をおえることとしたい。

（吉川忠夫）

「東洋史研究」バックナンバー

第二十六卷第四號　＊八〇〇圓　第二十九卷第四號　八〇〇圓　第三十二卷第四號　八〇〇圓
第二十七卷第一～三號　各六〇〇圓　第三十卷第一號　六〇〇圓　第三十三卷第一、二號　各六〇〇圓
第二十八卷第一號　＊六〇〇圓　第三十卷第二・三號　八〇〇圓　第三十三卷第三號　八〇〇圓
第二十八卷第二・三號　八〇〇圓　第三十卷第四號　八〇〇圓　第三十三卷第四號　六〇〇圓
第二十八卷第四號　八〇〇圓　第三十一卷第一～三號　各六〇〇圓　總目錄　一、〇〇〇圓
第二十九卷第一號　六〇〇圓　第三十一卷第四號　八〇〇圓　（＊殘部僅少）
第二十九卷第二・三號　八〇〇圓　第三十二卷第一～三號　各六〇〇圓

京都市左京區吉田本町　京都大學文學部內　振替　京都三七二八番　東洋史研究會